

# 幼児教育史学会第7回大会研究発表概要

(2011年12月3日)

1. 9:15~9:40

## ジョン・コレットの子ども観

大川なつか（白鷗大学非常勤講師）

概要 本発表では16世紀初頭に活躍したイギリス人人文主義者であるジョン・コレット（John Colet, 1467-1519）の子ども観について考察する。コレットは、イタリア・ルネサンスからの思想的潮流の下、友人デシデリウス・エラスムスの協力を得て、聖パウロ学校（St. Paul's School）を設立した。この学校は後続する人文主義学校のモデルとなり、一つの新しい教育の在り方を示すこととなった。コレットによる子どもに関する言説や教育実践を明らかにすることによって、やがてはルソーの「子どもの発見」につながっていった子どもの見方に関する思想的潮流を探る。

2. 9:40~10:05

## 明治後期の広島女学校附属幼稚園における保育実践の検討

金子嘉秀（広島大学大学院）

概要 明治後期の広島女学校附属幼稚園は『婦人と子ども』、および『京阪神連合保育會雑誌』上で、「現今のアメリカ風」すなわち新式の幼稚園の代表例として、その名が挙げられ、その保育カリキュラムは、当時から注目を集めてきた。本発表では、田中まさ子、橋川喜美代、柿岡玲子らが先行研究で用いた史料に加え、最近になって広島女学院大学に寄贈された卒業生の保育案ノートを用い、当該幼稚園における保育内容の構成上の工夫について分析を行なう。

3. 10:05~10:30

## 明石女子師範学校附属校園における幼小連携

—モンテッソーリ法への対応と幼稚園カリキュラム—

杉浦英樹（上越教育大学）

概要 1912(大正元)年『分団式動的教育法』を刊行し動的教育論を主張する明石女子師範学校の及川平治は、生活・作業主義の導入やフレーベル主義の克服に向けてモンテッソーリ法に期待をかけ、附属幼稚園の保姆と研究を試みている。幼小が軒を連ね連絡も密接になされていた附属校園の教師たちがこの教育法にどのように対応したかについては、まだ十分明らかにされていない。本報告では特に、同法をめぐる幼稚園側の取り組みと、同園のカリキュラムの内容への影響について、所蔵史料の検討を通して可能な限り明らかにする。

4. 10:30～10:55

#### 児童救済・保護の政治学—岡山孤児院解散・託児所令制定運動・富田象吉—

稲井智義（東京大学大学院 学振研究員）

概要 現在の幼児教育・保育の諸問題を歴史的に反省する為に、その政治を問う研究がなされている（小玉、鳥光、池田）。本発表はこれらの動向とも関連しつつ、1930年代前後の相互に関連する三つの現象・人物を通じて、児童救済・保護の政治を解明する。1節では1926年の岡山孤児院解散の肯定派と否定派の論調を整理する。特に少数の肯定派富田象吉が児童保護事業者会議でも批判に晒された事実を提示し、同会議の出席者の多様性が示される。2節では、その後も開催され富田も出席した同会議における託児所令制定の議論に注目する。同会議は多様な意見が出るにもかかわらず議論が無く制定が採択される政治的に無意味な空間であった。3節では、1935年に富田が会議出席者を批判した論文を通じて、児童救済・保護をめぐる政治のありようを明らかにする

小休憩（10:55～11:05）

5. 11:05～11:30

#### 城戸幡太郎の幼児教育論—「15年戦争」期を中心に—

浅野俊和（中部学院大学）

概要 城戸幡太郎の「幼児教育」研究は、1931年6月の満州事変から、1937年7月の日中戦争、1941年12月の太平洋戦争を経て、1945年8月のポツダム宣言受諾による敗戦までの足掛け15年の戦時体制下、いわゆる「15年戦争」期に主としてとりくまれた。それは、「保育問題研究会」の結成・指導と、主著『幼児教育論』（1935年）の執筆に象徴される。本発表では、あえて戦時体制の変化に基づく3つの時期区分（「満州事変」期、「日中戦争」期、「太平洋戦争」期）を重ね合わせながら、城戸の思想的変遷をたどることで、彼の「幼児教育」論に見られる歴史的特質を示してみたい。

6. 11:30～11:55

#### 倉橋惣三と山下俊郎—現代の視野から比較を試みる—

坂入 明（東京家政大学）

概要 「子ども子育て新システムと幼保一体化」の日本の今日的状況からみて、倉橋惣三と山下俊郎の幼児教育・保育界に残した業績は偉大なものがある。これからの幼児教育・保育の一体化を考える上で、方向性と展望を求めるヒントを二人の思想のなかから考察したい。

7. 11:55～12:20

#### レッジョ・エミリア幼児教育実践の構築過程に関する研究

## —1970年代を中心に—

濱田 真一（白梅学園大学大学院）

概要 レッジョ・エミリア（以下レッジョとする）の幼児教育実践は、その方法や活動内容については広く研究・紹介されているが、実践の構築過程を歴史的に分析した研究は少ない。レッジョ実践はレッジョ市民の教育に対する願いにローリス・マラグッツィ(Loris Malaguzzi:1920-94)の理論が形を与え、様々な困難を潜りながら構築されたものであり、その過程を明らかにすることは重要である。本発表では特に、レッジョ実践の一つの転換期であった1970年代に焦点を当て、当時のレッジョで実践されていたプロジェクト、マラグッツィの思想、レッジョを取り巻く社会的背景について検討することで、レッジョ実践構築の過程を明らかにすることを目的としている。

### シンポジウム 14：15～17：00

#### 「保育実践史の中のプロジェクト・メソッド」

趣旨： 日本では昨年1年間に約70万組の夫婦が生まれ、他方で24万組の夫婦が離婚した。単純に考えれば3組に1組の夫婦が離婚する社会になったということになる。この半世紀にわたる社会変動で、子どもたちは自然環境を失い、遊び仲間を失うなど地域社会の様々なリソースを失ってきたが、ついに最も基本的な帰属集団である家族が安定感を失ってきている。当面する幼保制度改革には、子育ての事業を通じて地域社会に新たな人間的交流の可能性を拓き、子どもたちの安全地帯を拡大することが求められている。

いっぽう近年の先進諸国における経済の行き詰まりは深刻だ。持続的な発展を可能にする「知識基盤社会」形成のために、子どもたちの学力と学習意欲の実態に改めて社会の関心が注がれている。先の教育基本法・学校教育法改定においては、学校教育の土台としての幼児教育の役割が強調された。日本の幼児教育は今、家族及び子どもの生活経験の格差拡大に対する対応と、「知識基盤社会」にふさわしい幼小接続の課題とを同時に求められているといえよう。

ところで、2005年中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化をふまえた今後の幼児教育のあり方について」はこうした課題への対応策としてまとめられたものであった。その答申のなかで、幼児期のプロジェクト活動が幼稚園と小学校、保育所の交流と連携・接続を推進する立場から言及され保育界の関心をよんだことは記憶に新しい。

北イタリアの保育や北欧・ドイツのプロジェクト活動が次々と日本に紹介され、保育関係者の耳目をひいた。大胆な子どものイニシアティブと教育者の目標・教材選択、教師を側面から助ける多種の専門職の存在、記録の取り方とその活用等々。しかし翻って見れば、プロジェクト活動そのものは、日本でも大正自由教育の時代からこれにとりくんだ人々がいた。それら実践の歴史は、現代にどのような足がかりを残しているのだろうか。あるいは継承発

展できなかつた場合には、どのような困難があつたのだろうか。20世紀日本の保育実践史をプロジェクト活動という視座から振り返り、私ども共通の土台を探りたい。

企画・司会 太田素子（和光大学）

## 提案

「及川平治のプロジェクト理解と明石女子師範学校附属学校園におけるその実践」

橋本美保（東京学芸大学）

明石女子師範学校附属学校園の主事及川平治は、1910年頃からアメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの研究を始め、1920年頃には附属幼稚園にプロジェクト・メソッドを導入した。及川は、どのような目的でプロジェクト・メソッドを導入し、それはどのような態勢で実践されていたのか。同学校園におけるプロジェクト・メソッドの研究・実践態勢の特質を明らかにした上で、戦前の日本でなぜこのような取り組みが可能であつたのか、現在の幼小連携の取り組みにも参考となり得る歴史的示唆について考察したい。

「和光幼稚園・和光鶴川幼稚園における「のりものごっこ」の成立と展開」

浅井幸子（和光大学）

和光幼稚園・和光鶴川幼稚園では、1964年に小松福三が乗れる電車をつくるという「のりものごっこ」の実践を行い、1990年頃まで総合活動として取り組んできた。本報告では、先駆的なプロジェクト活動として着目されてきた「のりものごっこ」の成立と展開を、1960年代に和光学園と日本生活教育連盟が取り組んでいた幼小連携の試みである「幼年教育研究」の文脈に位置づけて検討し、その歴史的な意義を明らかにする。

「広島大学附属幼稚園のプロジェクト活動」

鳥光美緒子（中央大学）

当該者がそのまま報告者でもあるという、特殊な立場からの報告です。自己弁護に陥るのでも、また、自意識のあまりの自己否定に逃げこむのでもなく、どれほど客観的にこの試みを語るができるか。残されているさまざまな当時の記録をもとにできる限り努力したいと考えています。シンポの設定趣旨に述べられているところの、保育実践史というコンテクストから見たこの試みに対する評価、批評ですが、これに対しては、これは、首を洗ってお受けするというしかありません。どうぞお手柔らかに。

## コメント

央戸健夫（愛知県立大学名誉教授）

中野光（元和光大学教授・日本生活教育連盟会長）